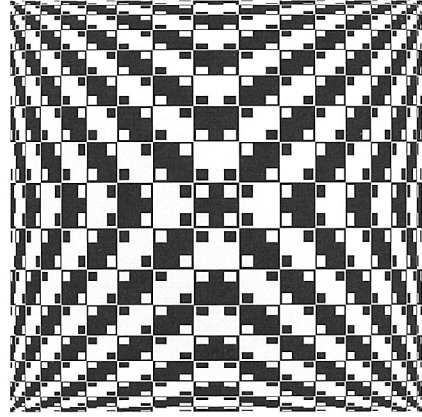


## 錯視の心理学

北岡明佳



筆者作「カッション」。すべて正方形が長方形でできているのに、カーブが感じられ、手前には膨らんだ感じに見える。

錯視という現象がある。目の錯覚ともいう。錯視の例を図に示した。この錯視図の基本原理は二つあり、一つは、市松模様錯視という傾き錯視（線の傾きが実際と異なるように見える現象）による彎曲錯視（直線が曲がつて見える効果）である。もう一つは、きめの勾配による遠近効果である（きめが細かい方が遠くに見える）。

ところで、錯視の研究をやっていると、実にさまざまな質問を受ける。一番多いのは、「ファッションは錯視ですか」といった質問である。本当は貧相な人がおしやれをすることで立派に見えるという視点でファッションを捉えるのであれば、おしやれをしている人には失礼な話であるが、確かにファッションも錯視である。しかし、筆者が研究しているような錯視とファッションの視覚効果の間には、あまり関係はない。

筆者が研究している錯視は、知覚レベルの現象である。対象の大きさや形や色が本来とは違って見えるとか、静止したものが動いて見えるといった現象である。心理学の中でも生理学に近い領域であると表現したらわかりやすいだろうか。

錯視を研究すると何がわかるだろうか。錯視そのものの性質がわかるのはもちろんであるが、トリックでできている視覚のメカニズムの一端が見えてくる場合があつて、これは知覚心理学の研究上役立つアプローチの一つである。また錯視研究と言えば心理学的アプローチが定番であるが、錯視の神経生理学的アプローチも（これまでなかつたわけではないが）実り多い方向性であろう。

（またおか・あきよし 知覚心理学）